2021 度プロジェクト研究所業績報告書(中間報告)

プロジェクト名	観光の新たな経済・経営に関する研究
研　究　所　名	実践女子大学観光経済経営研究所
設　置　開　始	2021.4.1
設　置　終　了	2024.3.31

＜研究業績報告書＞

今年度の研究計画の概要
現在、オーバーツーリズム問題は観光の自粛によって形を潜めているが（Go To トラベルで一部復活)、感染拡大が終息したときにはよりひどくなって再び発生すると予想される。新型コロナ禍の観光を含めてオーバーツーリズムに関する経営学と経済学が連携した研究は喫緊の課題である。 このような観点から今年度は、観光地の状況をコロナ以前と以後に分けて、文献やデータを基に理論的研究を行う。研究所メンバーの経済学・経営学分野の理論的研究を互いに共有し、ブラッシュアップするために、3 回程度の研究会を開催する。理論的研究は 1 年目を中心に行うが、3 年目まで続けられ、その成果はメンバーの所属する学会のジャーナルや紀要に投稿する。

今年度の研究実績
・研究会を 2 回開催（第 1 回目は Zoom、第 2 回目は対面） ＜第 2 回研究会（於：実践女子大学）の模様＞

＜吉田研究報告＞　　＜角本研究報告＞

・学生観光プレゼン大会を前倒しで開催

日本観光学会関東支部と共催したので、詳細は日本観光学会の web サイトに掲載されている。
http://www.kankoga.or.jp/event.php?pg_now=1#event91

・コロナ禍のため現地調査は実施されず、メンバー各自が主に文献研究に基づく理論的研究を行った（詳細は下記の各項目へ）。

現在までの進捗状況
１．事業計画の進捗度について（①～④のいずれかを選択してください） ①順調である　②おおむね順調である　③やや遅れている　④遅れている
※上記の進捗度を示す事由を記載のこと。「やや遅れている」「遅れている」とした場合は、改善点を記載。（計画の見直しが必要な場合はその内容も記載すること） ・対面での研究会が 1 回しか開催できず、現地調査にもほとんど行くことができない状態であったが、1 年目の事業計画の中心が理論的研究であることから、下記のように成果としてはおおむね順調であると評価される。
２．目標達成状況について（①～④のいずれかを選択してください） ①　達成した　②おおむね達成した　③十分達成されたとはいえない　④未達成である
※上記の目標達成状況を示す事由を記載のこと。「十分達成されたとはいえない」「未達成である」とした場合は、改善点を記載。（計画の見直しが必要な場合はその内容も記載すること） ・メンバー各自での理論的研究はおおむね進んでいるが、対面での研究会が 1 回しか実施できていないので、経済学と経営学との連携した研究を目標の 1 つとしていることから、その観点からは目標を十分に達成したとは言い難い。 ・1 年目の未消化予算を 2 年目にある程度繰り越すことを認めていただいたので、コロナ禍が和らぐことを前提に、組織的に現地調査や対面での研究会を積極的に実施し、経済学と経営学が連携した研究を進める。

取り組み状況について

１．組織的な取り組みができているか（①～④のいずれかを選択してください）

①できている ②おおむねできている ③あまりできていない ④できていない

※上記を示す事由を記載のこと。「あまりできていない」「できていない」とした場合は、改善点を記載。

今年度は 3 回程度研究会を開催する予定であったが、コロナ禍のために Zoom で 1 回、対面で 1 回しか開催できなかった。その代わりに、メンバー各自で理論的研究を行ったが、その成果はコロナ禍にもかかわらず下記のようにかなりあげられている。

さらに、3 年目に実施予定の学生観光プレゼン大会はメディア（Zoom）開催が可能だったので、前倒しで開催した。これには、メンバーの角本、麻生、長橋、黒木の指導する学生チームが参加することができた。

トータルに見て、組織的な取り組みは「②おおむねできている」と評価される。

２．研究所メンバーの活動状況について

※分担された役割を含めた活動状況をメンバーごとに記載してください。

＜角本＞

・研究所の運営全体を統括し、2 回の研究会をコーディネートした。

・文献研究を主に行い、共著の分担章を執筆中である。

＜吉田＞

・2021 年 9 月 12 日（日）～9 月 15 日（水）、前任校での手続きなどのために宮崎を訪問した際に、ANA ホリデイ・イン リゾート 宮崎の総務部長等と短時間ながら意見交換を行い、青島地域の現状を視察した。

・10 月 31 日（日）～11 月 1 日（月）、塾長を務める観光みやざき創生塾の開校式に参加した際に、宮崎県の観光関係者と短時間ながら意見交換を行った。

・2022 年 3 月 14 日（月）、塾長を務める観光みやざき創生塾の終了式に参加した際に、宮崎県の観光関係者の観光ビジネスプランの構想を聴き、関係者と意見交換を行った。

・3 月 17 日（木）宮崎県公立高校の課題型学習（地域解決課題）の最終発表会に参加し、観光を含む地域活性化の高校生のプレゼンを聴いた。なお、同校には 2018 年度から高校生のグループワークに秋に 1 日かけて助言をしており、今年度は 9 月 24 日（金）、助言を行った。その研究成果を、下記の吉田（2022b）として近刊予定である。

＜井上＞

・消費者行動の視点から「観光の持続可能性」について調査研究を実施する予定であったが、コロナ禍のために調査研究ができず、予定されていた研究を実施することができなかった。しかし、本研究に資する関連研究は行えたので、次年度の本研究に役立てたい。

＜麻生＞

・COVID-19 下での観光リスクの精査とその対応策を調査し、分析中である。

・オーバーツーリズム下での混雑発生時における最適入場者数と料金体系の経済学理論モデルを構築している。

＜長橋＞

・観光経済学の理解を深めるために下記[1]～[3]の図書を購入するとともに、オーバーツーリズムに関わる文献収集（[4][5]等）を行い、文献研究を主に行った。

[1] Chen. Y. (2021) Economics of Tourism and Hospitality Routledge.

[2] Dwyer, L., P. Forsyth, W. Dwyer (2020) Tourism Economics of and Policy　2nd ed. Channel View Publications.

[3] Vanhove, N. (2018) The Economics of Tourism Destinations Routledge.

[4] Cerina, F. (2007) “Tourism specialization and environmental sustainability in a dynamic economy” Tourism Economics vol.13 pp.553-582.

[5] Marsiglio, S. (2017) “On the carrying capacity and the optimal number of visitors in tourism destinations” Tourism Economics vol.23(3) pp.632-646.

＜津田＞

・COVID-19 の感染拡大の終息がみられず、組織的な現地調査の企画ができなかったが、個別調査としてはマイクロツーリズムの拠点とされる道の駅の観察調査を行った。

【主な観察調査地】

　道の駅「あわじ」、「うずしお」（兵庫県）、

　道の駅「京都新光悦村」「スプリングスひよし」「美山ふれあい広場」「ウッディー京北」（京都府）、

　道の駅「のと千里浜」「高松」（石川県）、

　道の駅「ウェーブパークなめりかわ」「カモンパーク新湊」（富山県）

＜黒木＞

・「観光教育へのフィードバック」について、この役割を果たすため、観光教育の演習系科目のテーマ設定や工程管理の確認を行った。具体的には、令和 3 年度は 2 年次前学期ゼミナール科目「プレゼミナールⅡ」において、日本観光学会関東支部主催・実践女子大学プロジェクト研究所共催「2021 年学生観光プレゼン大会」への参加を課題として設定し、知識のインプット、グループワーク、アウトプットの一連の流れを確認した。

成果について
１．波及効果が見込まれる成果が得られているか
※上記の状況を示す事由を記載のこと。（波及効果については、主に事業終了後の発展を問うものであるため、設置申請書で示した波及効果および教育又は社会に還元するために得られる知見に対し、現在の見込みを記載してください。申請時との差異がある場合も、その旨記載してください。） ＜角本＞ ・近年、行動経済学の現実面への適用が非常に有効であることが明らかとなり、COVID-19 対策としてもその知見がかなり用いられている。この行動経済学はマーケティングとの親和性がかなり高く、マーケティングの大家であるコトラーもそのような認識の発言をされている。本研究所の経済学分野のメンバーのうち、麻生（2021）ではすでに行動経済学からのアプローチを試みている。角本も現在執筆中の共著原稿で行動経済学の視点を取り入れている。今年度は経済学と経営学との明確な連携は進んでいないが、理論論究の中でその素地は固められつつあり、

次年度での展開が期待される。
・教育面での波及効果は、今年度の学生観光プレゼン大会で参加学生によい経験の場を提供できたと言える。次年度も学生観光プレゼン大会の継続により参加学生に直接に還元される。また、メンバーの担当授業においても今年度の研究成果が反映される。
＜吉田＞
・宮崎県青島地域の観光・リゾート地としての修正された構想、今後の展開については、COVID-19の影響によって、外国人観光客の入り込みが消失しているなどの負の影響がある反面、テレワーク、移住、東京の仕事を地方でリモートワークしながら、環境の良いところで子育てするなどの、新しい、前向きな兆候も見られる。
・COVID-19の影響がコントロールされる状況になれば、新しい、前向きな動きが顕在化すると見込まれ、それらを調査することで、青島地域の観光・リゾート地としての修正された構想、今後の展開を考察できるとともに、全国的なテレワーク、移住などの傾向も併せて考察できると期待している。
＜井上＞
・今年度実施した研究と本研究テーマは一見無関係のようにも見えるが、日経広告研究所と共同実施している研究テーマからも明らかなように、コロナ禍を経て消費者の価値観は変化しつつある。このような視点から、観光の持続可能性について研究することによって、観光の持続可能性について新たな知見を得ることができると考える。
＜麻生＞
・理論構築および実証分析において得られた知見を学会や研究会を通じて発表し、観光研究の発展向上に努める。
・観光リスクや危機に対して、企業が採るべき対応策を整理分析し、その成果を社会に向けて還元していく。
＜長橋＞
・上述の文献[1]～[3]は近年の観光経済学における総論的研究書の代表的なものであり、これを参考とすることで本プロジェクトのテーマであるオーバーツーリズムへの理解と分析の基礎を固めることが期待できる。
・またその内容の一部は、授業科目「観光経済論」に反映することで教育面での還元も期待できる。
＜津田＞
・新たな感染症の拡大で至近距離の観光としてマイクロツーリズムが見直され、道の駅のいくつかは、この潮流を活かすような取り組みを行っている。
＜黒木＞
・令和 3 年度は、プロジェクト研究の分担研究者として、担当する役割を意識した上で、プレゼン大会に「まずは参加」させていただいた。令和 4 年度以降も、試行的な取り組みを繰り返し、効果的な「研究成果の能動的な教育への還元」に向けた知見を得たいと考えている。
・能動的な学習では、観光経済・観光経営の理論や事例を提供し、アイディアを創出させ、組み合わせることによって観光の諸課題を解決する、一連のプロセスの汎用的な枠組みの提示を

試みたい。

２．雑誌、学会発表、図書など

＊文頭の記号の意味　・論文　○著書　□学会発表等

＜角本＞

○角本伸晃（共著）『観光経済論』（観光学全集：原書房）の第 2 章「観光と供給」と第 9 章「観光と持続可能性」を執筆中である。

□角本伸晃「持続可能な観光」第 2 回　観光の新たな経済・経営に関する研究所研究会（2021 年 10 月 30 日）

＜吉田＞

○吉田雅彦（2022a）『地域マネジメント - 地方創生の理論と実際 -（改訂版）』鉱脈社

○吉田雅彦（2022b）『総合的な探究の時間ハンドブック - 地域課題解決編 - 』鉱脈社（近刊）

○吉田雅彦（2022c）『 - 文系学生のための - キャリアデザイン・就職活動入門』鉱脈社（近刊）

□日本観光学会 関東支部会（2022 年 3 月 20 日）で『宮崎での観光の取り組み』と題して基調講演。

＜井上＞

・井上綾野(2022a)「倫理的消費における信念形成過程の探究」『生協総研賞 第 18 回助成事業研究論文集』, pp.30-41

・井上綾野(2022b)「パッケージにおける倫理的表記の信頼性と知覚品質—フェアトレードラベルと環境ラベルの比較—」『実践女子大学人間社会学部紀要』第 18 巻, pp.21-32

・井上綾野(2022c)「有機食品の購買動機からみた市場拡大策 —購買の利他性・利己性の視点から—」『アグリバイオ』Vol.6(4) pp.8-12

・井上綾野(2021a)「【広告アゴラ】エシカル消費の新たな視点」『日経研究広告所報』Vol.316, pp.44-45

・井上綾野(2021b)「変化する消費者—若者とエシカル消費」『日経研究広告所報』Vol.319, pp.8-9

□井上綾野(2021)「変化する消費者—若者とエシカル消費」日経広告研究所オンラインセミナー

＜麻生＞

・二替大輔・麻生憲一（2021）「混雑下での観光関連施設の入場者数と料金設定の最適化」『帝京経済学研究』55（1）113-121

・麻生憲一（2021）「コロナ禍で宿泊客の行動はどう変わったか？：行動経済学からのアプローチ」『RT（1)』42-47

・麻生憲一・二替大輔（2021）「観光関連施設の動向と混雑状況モデル」『立教大学観光学部紀要』第 24 号 152-162

○麻生憲一「第 9 章 観光リスクと企業戦略」『観光産業のグレートリセット～成長をどうデザインするか～』中央経済社（近刊）

□二替大輔・麻生憲一（2021）「混雑下状況下での入場者時間割り当て」（南山大学ワークショップ・観光経済経営研究会）

□麻生憲一（2022a）「SDGs と観光戦略」（愛知大学ワークショップ・観光経済経営研究会）
□麻生憲一（2022b）「事業継続計画（BCP）と危機管理」（日本観光学会関東支部会）
□二替大輔・麻生憲一（2022）「混雑発生における観光者数と見学時間モデル」（南山大学ワークショップ・観光経済経営研究会）
＜長橋＞
○上述の文献[1]~[3]を参考にして、長橋透（共著）『観光経済論』（観光学全集：原書房）の第 3 章「観光市場と市場構造」と第 7 章「国際観光政策」を執筆中である。
＜津田＞
・津田康英「枇杷の活用と観光物産化への課題」『奈良県立大学研究季報』第 32 巻第 3 号、pp.47-68、2022 年 2 月
＜黒木＞
・黒木宏一・濱川和洋（2022）「専門分野の異なる学部横断科目間連携プロジェクト：TRICKART PROJECT の実践報告」『アクティブ・ラーニング研究』第 2 号（日本アクティブ・ラーニング学会），95-99 頁，査読あり
・黒木宏一・内山敏典（2022 年 3 月 31 日発行予定印刷中）「陶磁器価格に影響を及ぼす製品特性の統計的分析」『伝統みらい研究センター論集』第 5 号（九州産業大学伝統みらい研究センター），53-64 頁，査読あり
○内山敏典・釜堀文孝・黒木宏一（2022）『九州地域における伝統産業需要の計量分析—公統計・アンケート調査をベースに—』九州産業大学伝統みらい研究センター，全 305 頁，B5 判，ISBN 978-4-9912207-0-8（第 2 章と第 3 章の執筆（共著），編集への参画，印刷会社との調整などの業務を担当）
□黒木宏一・内山敏典（2021）「陶磁器の製品特性と価格：20 世紀前半の売立目録の統計分析」日本計画行政学会第 44 回全国大会，於オンライン